



ふる 第1章 地、大いに震う

—元禄時代に襲った巨大地震津波—

9月1日は「防災の日」として、毎年、全国各地で大規模な防災訓練が催されています。この防災の日は、1923年9月1日に発生し、関東地方に10万人もの犠牲者を出した「関東大震災」にちなんで定められています。また、私たちの記憶にも新しい「1995年兵庫県南部地震（阪神淡路大震災）」や「2004年新潟県中越地震」により、地震の恐ろしさをまざまざと知ることができました。

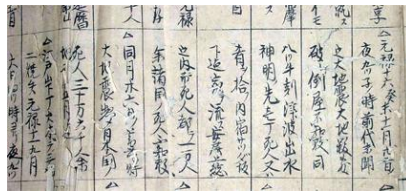


1. 津波が襲ってくる様子
内閣府作成の紙芝居「稲村の火」より引用

しかし、今から約300年前に千葉県もこれらの地震に匹敵する、または上回る地震によって大きな被害を受けているのです。この地震は、「元禄地震」と呼ばれ、現在の千葉県、神奈川県、東京都を中心に大きな被害が出ました。特に千葉県では、2,000人以上の人々が津波によって亡くなっています。

このような多くの犠牲者を出した「元禄地震」とはいったいどんな地震だったのでしょうか？それを知るには、寺に残された過去帳、被災者への慰霊碑、体験者が記した手記など過去の記録が重要な手がかりとなります。第1章では、これらの記録をもとに「元禄地震」の姿をみていきます。

地震の発生



(過去帳の奥書)

元禄十六年十一月廿二日夜九ツ子ノ時、前代未聞之大地震、大地夥數破レ倒屋不知數、同ハツ半刻津波、出水神明ノ先志丁死人又ハ着ツ拾フ、内宿サツタ振下迄家ヲ流ス、安房上総之内ニ而死入都テ一万人余、諸国ノ死人不知數

(上は奥書の原文。下はその現代語訳)

2. 高照寺(勝浦市)の過去帳

この過去帳は勝浦における津波被害を記した資料です。奥書には元禄地震が発生したときの様子が記されています。

(個人情報保護のため一部画像処理を施しております。)

元禄16年11月23日(1703年12月31日)の午前0時頃、真冬の深夜に突然、大きな揺れが関東地方を襲いました。いわゆる「元禄地震」です。地震はちょうど日付が変わる真夜中に発生したので、古文書や言伝えでは、11月22日とも11月23日ともいわれています。この地震は、高照寺過去帳に「前代未聞の大地震・・・」とあるように、かなり大きな地震だったようです。しかも津波も発生し、「死者一万人余」とあるように、多くの犠牲者が出たことがわかります。

「元禄十六年十一月二十二日の深夜十二時頃、前代未聞の大きな地震があった。大地が大きく裂け、数え切れないほどの建物が倒れた。そして深夜三時ごろには津波が押し寄せ、人や家が押し流された。安房上総だけで死者は一万人余り、全体では数え切れないほどの死者が出た。」

元禄年間には、「元禄文化」とも呼ばれたように町民文化が発展し、明るく活気のある時代として知られていますが、末期になると、元禄の大火や元禄地震などの災害が江戸を襲います。特に元禄地震は幕府の財政に大きな打撃を与えたばかりでなく、元号が「元禄」から「宝永」へ変わる一因になったともいわれています。

【過去帳】

過去帳(かこちょう)とは、寺院で、所属している檀家で亡くなった人の戒名(法号・法名)、俗名、死亡年月日、享年などが書かれている帳簿のことで、多くは折り本形式になっています。各家の累代の記録が記述され、過去帳によっては死因や身分、生前の事跡などが詳細に記述されていることもあります。寺院ばかりでなく各家庭の仏壇にも置かれることもあります。



津波の恐怖

津波がどれくらい恐ろしいものかを知る手がかりとして、文書に残された体験記があります。体験記には津波から逃げる様子が生々しく記されているほか、この体験を子孫へ教訓として伝えようとする思いが読み取れます。

①高崎浦津波記録（南房総市 個人蔵）

旧富山町高崎浦の名主が記録したといわれています。いつ書かれたかは不明です。寝静まった頃、急に襲ってきた地震の揺れと津波におびえ、あわてふためく状況が詳しく記されており、地震の揺れの状況、家屋が押し潰される状況、津波の押し寄せる状況などやデマに惑わされた人々の姿を知るうえで貴重な資料です。



3. 現在の岩井海岸（高崎浦）

（現代語要約）
元禄十六年の冬、十一月二十二日は空も晴れ、海は風もなく波が穏やかであった。日も暮れて夜の十二時ごろ、突然の地震が起きた。家中寝静まっていたところを、起きては転びながらもやっと立ち上がり、部屋を明け後ろへ出た。親子みんな無事に門口に廻った。（中略）
浜台の老若男女が皆円正寺山の西にある平地に上って小さな松の木にすがった。寝静まったときの出来事なので慌てて、着物も帯びも忘れ、真裸で出る男女もあった。（中略）
李兵衛が家に戻ってみると、庭の中に波が押し寄せて腰くらいの深さになって、井げた（四角に組んだ井戸の枠）の縁が少し見えるほどであった。何もかもが海になってしまい、恐ろしいので早く家の中に入り、伊勢神宮のお札を持ってまた寺山に戻った。（中略）
十二月一日まで岡の庭に居た。その日、午後四時ごろ浜の家に戻った。哀れな事に、親は子を亡くし、また子は親を亡くし、夫婦もはぐれ、さらに幼子も波にさらわれ、親兄弟嘆き悲しむ有り様は、なんとも心痛む思いであった。目も当てられず、言葉も消えうせるほどのはかなさであった。（中略）
（地震から）十日十五日のうちは、浜に多くの死人が打ち寄せられた。昼夜犬がその死体を食いちぎって、家の門口までくわえてくるので恐ろしくて外に出られない。（後略）

②池上家文書「一代記」（白子町 個人蔵）

白子町の池上家の先代である長柄郡小母佐村（白子町）の医師、池上安閻が書き記した覚書です。今の白子町南白亀川をさかのぼってきた津波によって、生死をさまよった筆者が一命をとりとめたときの津波体験の様子が記されています。津波にまつわる言伝えや津波に対する心得も記されています。「高崎浦津波記録」と並び元禄地震を今に伝える貴重な記録です。



4. 「一代記 付リ津波ノ事」

（現代語要約）
元禄十六年、十一月二十二日の夜、子の刻（深夜十二時ごろ）に突然大地震が襲った。山崩れで谷は埋まり、地割れで水は吹き出るし、また石壁が崩れて家は倒れるし、とてもこの世の出来事とも思えなかつた。こんなときは津波がくるので、早く逃げれば助かる。
昔から、津波が来るときは井戸の水が干上がると云われているので、井戸を見たがいつもと同じである。海辺を見れば潮が大きく引いていた。そして、丑の刻（午前二時ごろ）になって、大山のような潮が九十九里浜に打ち寄せてきた。（中略）
数千軒の家が流され、また数万人の僧俗男女のほか、牛、馬、鳥、犬まで溺死した。木や竹に捕まって助かっても寒さで死んでしまった。自分も流されて五位村（現白子町五井）の十三人塚の杉の木に取り付いたが既に寒さで仮死状態であった。しかし、情けある人が焚き火で暖めてくれたので奇跡的に助かった。家財はすべて流されてしまった。明石原の上人塚の上では多くの人が助かったが、遠く逃げようとしても市場の橋や五位の印塔では多くの人が死んだ。（中略）
これからは、大地震の時は必ず大津波が襲ってくると心得て、家財を捨てて早く岡へ逃げる。たとえ近くても高いところだったら助かるのだ。古所にある印塔の大塚や屋根に上った人も助かっている。このことよくよく心得ること。（後略）

元禄地震被害の状況

元禄地震では大きな揺れや津波によって、多くの死傷者や家屋の損壊、または土砂崩れなど大きな被害が発生しました。これらの被害の状況を記した公的な記録としては、当時江戸幕府の側用人であった柳沢吉保による「楽只堂年録」があります。そのほか、各地に残る供養碑、墓碑、古文書に記された記録などを頼りに、元禄地震の被害について多くの研究がなされていますが、研究者によってさまざまな被害の状況が報告されており、現在のところ被害の大きさは確定されていません。

下表に示した「資料日本被害地震総覧」(宇佐美、1977)によると、元禄地震における死者数は1万人を超えています。その中でも、房総(千葉県)での死者数は全体の6割以上を占めています。「流家」とは津波で流された建物を示していますが、房総での被害が特に大きくなっています。このことから、房総の死者数には津波による死者もかなり含まれていることが容易に推定されます。

【元禄地震の被害一覧】

領地	死者数	潰	半壊	流家
甲府領	83	345	281	
小田原領	2,291	8,007		
房総	6,534	9,610		5,295
江戸	340	22		
関東駿豆(武士)	397	3,666	550	有り
諸国	722	774	160	668
計	10,367	22,424	991	5,963以上

(注意)

潰：家屋が潰れて全壊したものを含みます。古文書では「潰家」または「伏す」という表現で状況を示しています。

「資料日本被害地震総覧」(宇佐美、1977)より引用

千葉県の被害状況

①津波による被害

津波による被害の様子は、古文書のほか、津波犠牲者を供養するための塔や墓碑、位牌などから推定することができます。これらの記録によると津波は銚子市から九十九里沿岸、南房総市、館山市、鋸南町などの沿岸市町村を襲いました。被害が特に大きかったのは白子町・長生村・九十九里町などの九十九里沿岸で、これらの地域では少なくとも2,000人以上が津波の犠牲になったといわれています。また、鴨川市でも集落が壊滅したとも伝えられています。津波の波高は、「日本被害津波総覧」(渡辺、1998)によると館山市相浜や南房総市(旧和田町)で10mを超えていたようです。

②強い揺れによる被害

当時地方を治めていた代官宛に出された訴状、山崩れなどを記録した碑、および幕府の公的記録である「楽只堂年録」などから、地震の激しい揺れによって家屋が潰され、崖や山が崩壊する土砂災害が発生したことがわかっています。押し潰された家屋の状況や数、土砂災害の状況から、地震の揺れは、房総半島で震度6~7と推定され、特に館山市と南房総市では「震度7」に相当する揺れがあったと思われます。また、北総地域でも震度5程度の揺れがあったようです。

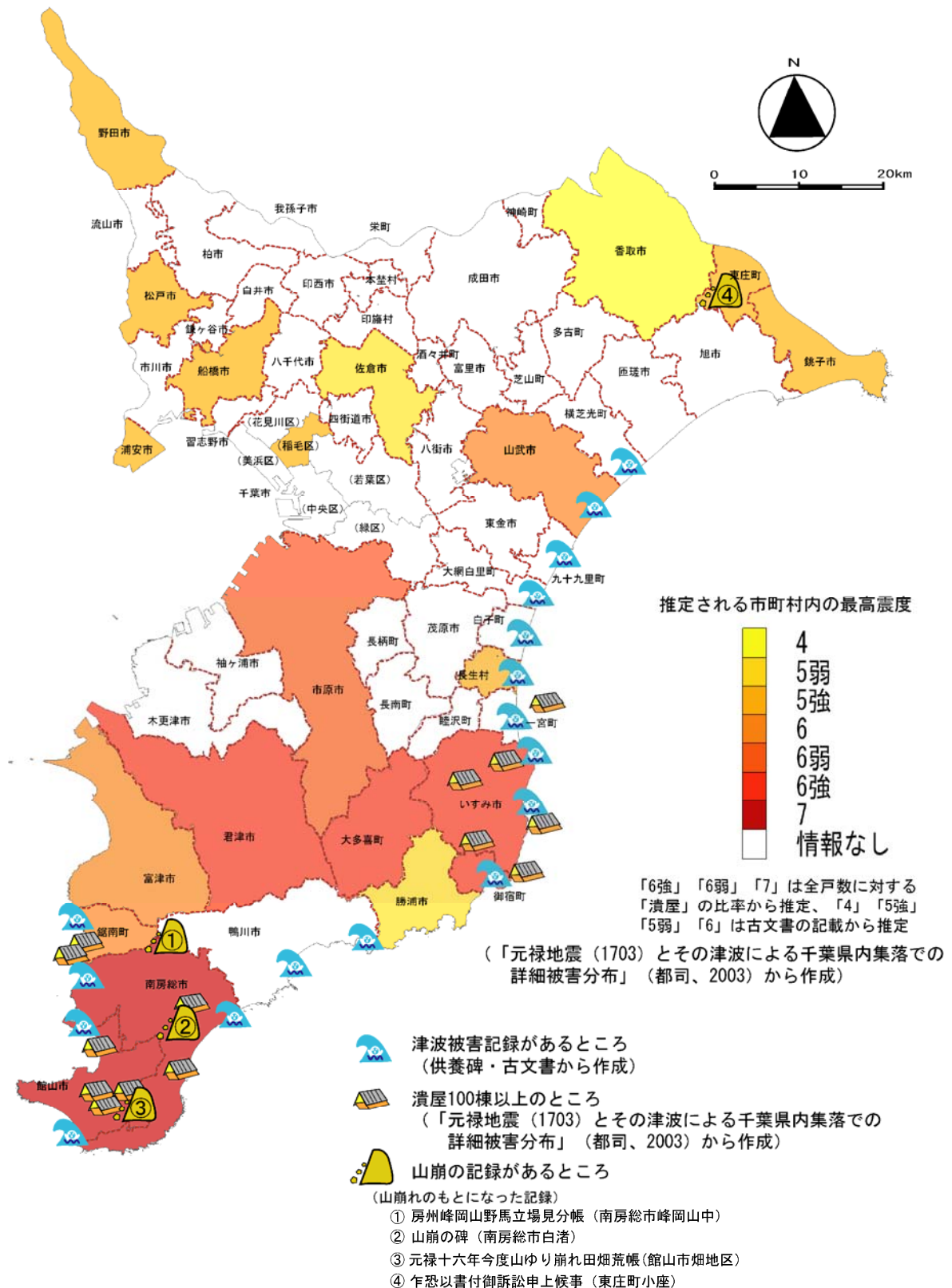
左の「元禄十六年今度地震、山崩れによる田畑荒帳」によると、館山市畑地区では山くみ(山崩れ)、川くみ(川岸崩れ)で3反6畝15歩(約3,620m²)が被害を受け、「ひわくび山」から「いいもりつか」まで約900間(約1,600m)の地割れができたと記されています。

山崩れについても、千葉県北東部の東庄町で、山崩れによって出水(湧水)が途絶えたため水の確保を巡って争われた記録が残されており、被害が千葉県に広くおよんでいたことがうかがえます。



5. 「元禄十六年今度地震、山崩れによる田畑荒帳」(館山市畑・個人蔵)

この文書は館山市畑地区における、元禄地震によって発生した山崩れによる田畑の被害状況の報告書です。



6. 千葉県における元禄地震被害の分布

古文書・供養碑などに残された記録から津波による被害、地震動による山崩れのあった場所を地図上に示しました。また、これまでの研究で想定された最大震度もあわせて示しました。